「除奸」と「殉難」の間——水戸学者・豊田天功と吉田松陰における楊継盛受容——

廖　嘉　祈

はじめに

天保期（一八三〇～）以降の江戸末期に広く知られる中国の忠臣として、南宋の岳飛と文天祥がまず挙げられる。彼らは、江戸前期からすでに浅見絅斎の『靖献遺言』または通俗文芸などを通じて広く受容されていた。[1] これに対し、先行研究が注目してこなかったのが、江戸末期にようやく本格的に受容される、明代中期の楊継盛（一五一六～五五、以下は適宜「楊」と略称）である。[2]

楊継盛の号は椒山、諡は忠愍である。嘉靖年間、明はモンゴルの外圧に悩まされていた。馬市を開いて貿易するという仇鸞の意見に対して、楊は「請罷馬市疏」を奉り、馬市には「十不可五謬」があると激烈に反対した。二年後の嘉靖三十二年（一五五三）、楊はさらに「請誅賊臣疏」を上奏し、当時権勢を誇ったとされる内閣首輔・厳嵩には「五奸十大罪」があると徹底的に糾弾した。このため楊は収監・拷問され、後に刑死した。この経歴に即して、江戸末期における楊継盛受容は、①異民族に妥協しないという「攘夷」の態度、②奸臣とされる仇鸞や厳嵩を除くという「除奸」の気概、③国に報いる壮烈な「殉難」の姿という三つの方面をめぐって、展開された。

楊継盛が江戸日本で積極的に言及されはじめたのは、安政期（一八五四～）以降、大橋訥庵・頼三樹三郎といった尊

攘家による漢詩においてである。この突如とした受容を促したのは、現在確認できる江戸時代唯一の和刻本で、水戸学者・豊田天功[3]（一八〇五～六四、以下「天功」）が嘉永五年（一八五二）に出版した木活字版の『楊椒山全集』であると考えられる。その出版や頒布について、天功が同じく水戸徳川家家中の桜真金や桑原信毅と緊密に連携していたことや、昌平黌に留学中の書生たちにそれを贈与していた記録に鑑みれば、同書は江戸末期に少なからず流布していたと思われる[4]。

江戸末期における楊継盛受容について、はやく明治期に、鈴木無隠が雑誌『陽明』を主宰した石崎東国宛の書簡で触れている[5]。大正期には『本朝文粋註釈』で知られる柿村重松が「楊椒山の学とその影響[6]」を撰し、天功や吉田松陰（一八三〇～五九、以下「松陰」）などの尊攘志士における受容を扱っている。しかし、時代背景により、受容の意義はもっぱら「東洋精神の顕揚」に見出されており、個々の受容者における関心の所在は解明できていない。戦後では、秋山高志が天功の出版に言及しているものの[7]、管見の限り、専論はいまだ存在しない。

以上を踏まえ、本稿では次の問題を考察する。楊の生涯が後世に提示した課題――奸臣の陰謀によって君主が惑わされる時、殉難も厭わずに、上書による抗争を展開しつづけるべきなのか――を、天功と松陰は自身の言説や行動においてどのように受け止めたのか。この考察によって、まずは水戸学派[8]における天功の思想史的位置を、藤田東湖（一八〇六～五五、以下「東湖」）や会沢正志斎（一七八二～一八六三、以下「正志斎」）との対比も交えて浮かび上がらせる。その上で、従来多用されてきた「尊王攘夷思想の伝播」ではなく、「楊継盛受容における特徴」という新たな切り口から、天功と松陰との思想の異質性を探りたい。

一、豊田天功における楊継盛受容
――「除奸」すれども「殉難」せず

天功は楊継盛のどの側面に惹かれ、その文集の顕揚に及んだのか。『楊椒山全集』に寄せたその嘉永五年（一八五二）の序文では、「椒山死して虐焔衰えざれば、是れ其の死 忠に過ぎたり。椒山の才を以てすれば、其れ何ぞ韜晦して時を待ち、以て大いに為すこと有らずや（椒山死而虐焔不衰、是其死過於忠。以椒山之才、其何不韜晦待時、以大有為乎）」という世間の見方を否定し、楊の自身を顧みない「除奸」行為や、その勇壮な「殉難」の意義を強く肯定している[9]。

東湖が同書に寄せた序文によれば、天功は十七歳の頃からすでに楊継盛の文集を耽読していた[10]。よって、楊がその

後の天功に意識されつづけたことは確実だと考えられる。しかしながら、天功の行動を検討すると、以下の事実が浮かび上がってくる。彼は楊と類似した境遇に置かれた際、「除奸」こそ大いに努めたものの、「殉難」する道は明確に拒絶していた。早年から心酔した楊の殉難の道を、天功はあえて選択しなかったのである。

㈠「除奸」

この選択は、天功が求めた「除奸」と関わっている。弘化元年（一八四四）五月、領内の天保改革を推進していた水戸徳川家当主の斉昭が謹慎に処せられた（改革派に「甲辰の国難」と呼ばれる）。これを受けて、『大日本史』志表の編修に携わっていた天功は激烈な雪冤運動を展開し、事件の黒幕と目された門閥派の筆頭・結城朝道（一八一八～五六、以下「結城」）らとの対立を厭わなかった。結城に宛てた書状には、以下のようにある。

亮当首明逆順、弁趙盾之邪正、以拒執事。執事以国法処之、則当束身以就刀鋸。以私法処之、則当掉臂以抗盛怒。君公幽囚、亮固不欲靦顔苟活偸生於天地間。（亮当に首めて逆順を明らかにし、趙盾の邪正を弁じ、以て執事を拒むべし。執事 国法を以て之を処せば、則ち当に身を束ねて以て刀鋸に就くべし。私法を以て之を処せば、則ち当に掉臂して以て盛怒に抗たるべし。君公幽囚し、亮固より靦顔にして天地の間に於いて苟活偸生するを欲せず。）[11]

この書状は天功の文集に見えるが、実際届いていたかは確認できない。しかし、天功が同時期に記した大量の上書を見ると、彼が水戸徳川家の三連枝や「粤相」（水野忠邦）などに結城らの処罰を訴え続けたことが確認できる。[12]その結果、天功は弘化二年（一八四五）に蟄居させられる。そこから志表の編修に復帰する嘉永六年（一八五三）まで、彼は『明夷録』（弘化三年）、『鶏鳴録』（弘化四年）、『籲天録』（嘉永五年）、『籲天後録』（嘉永六年）を立て続けに著しているが、これらの著作に貫かれているのは、以下二つの内容である。

一つは、斉昭の施策を咎める徳川公儀の詰問に対して、天保改革の「善政」を回顧し、それらはすべて夷狄防禦・国家安寧のためになされたものだと論駁する内容である。姿勢の強弱に差異が見出されるものの、この内容自体は、天保改革を詳細に記録した東湖の『常陸帯』に共通している。二つ目は、斉昭失脚の黒幕を結城や彼と結びつく谷田部雲八、さらには老中の阿部正弘などに求め、彼らの「奸計」を激越に糾弾する内容である。これは東湖の著述に見られない独自のものである。

(二)「殉難」

以上のように「除奸」を目指す天功であるが、彼はなぜ「殉難」を拒絶したのか。『鶏鳴録』では次のように説明している。

或云、志士之作事、最戒其始終不一。夫既以是始、亦宜以是終。且物極則変。逆党之枉害正士、極其惨虐、則当知好運漸至、重見天日之期在近也。然天下大勢、非一挙手一投足之所能転移、党錮東林、具極千古之惨毒、而国従而亡者、不可以尋常道理論也。余固不能作此履険徼幸之事也。（或ひと云ふ。「志士の事を作すや、最も其の始終一ならざるを戒む。夫れ既に是を以て始むれば、亦た宜く是を以て終ふべし。且つ物極まれば則ち変ず。逆党の正士を枉害し、其の惨虐を極むれば、則ち当に好運の漸く至り、重ねて天日を見るの期近きにあるを知るべきなり」と。然れども天下の大勢、一挙手一投足の能く転移する所に非ず。党錮東林、具に千古の惨毒を極め、而して国従ひて亡ぶは、尋常の道理を以て論ずべからざるなり。余固より此の険を履み幸を徼むるの事を作すこと能はざるなり。『鶏鳴録』[13]）

蟄居後の天功は、これ以上雪冤を訴えても、効果は見込めないばかりか、さらなる災禍を自ら招いてしまうと危惧している。時勢をはかってから、己の死生を決めることが重要であると天功は説きはじめ、潜伏する方針に舵を切ったのである。[14]

すなわち、結城らを糾弾する以外、『明夷録』と『鶏鳴録』には重要な撰述目的がもう一つあった。雪冤運動の成否が不透明であるいま、忠義を尽くす道は「殉難」一択ではないと弁明することである。これは易占の結果[15]という説明に加え、文天祥・張世傑を含む中国史上の忠臣の事蹟を多く挙げる形で、詳しくなされている。

文天祥張世傑、不肯一一雷同。観天祥所言、或有責世傑失策者。然各効爾力、致命遂志、万世之下俱不失為忠臣。余之所見如此。若其世論之紛紜、非所顧也。……無論其不知我者、謂解縉負約不死。雖其知我者、或当有世傑絶纜奪港之疑。至余中心所在、雖不逮乎、庶幾乎箕子矣。（文天祥張世傑、一一雷同するを肯ぜず。天祥の言ふ所を観れば、或は世傑の失策を責むる者有り。然れども各々爾の力を効し、命を致し志を遂げ、万世の下に俱に忠臣為るを失はず。余の見る所此の如し。其の世論の紛紜が若きは、顧みる所に非らざるなり。……其の我を知らざる者、解縉の約に負きて死せずと謂ふは論無し。其の我を知る者と雖も、或は当に世傑の纜を絶ちて港を奪ふの疑有るべし。余の中心の在る所に至りては、逮ばずと雖も、箕子を庶幾ふなり。『鶏鳴録』）

表立った雪冤運動を展開する「吉桑二子」（改革派である吉成信貞、桑原信毅）を意識した弁明である。南宋末の対元

戦闘に際して、張世傑の決断には不備が多かったと同時代の文天祥が批判している。しかし、後世から見れば、文天祥のように、捕まえられたのちに長らく囚人として忠節をつくすことと、張世傑のように、戦闘の現場で潔く殉難せず、戦線を離脱して抗戦しつづけたこととは、同じく忠臣として称揚すべき行為であった。事情を知らない人は、殉難するという表明を反故にし、明成祖朱棣に仕えてしまった解縉に自分を擬えている。交遊のある人でさえも、生き延びようとした張世傑をもって自分を目している。しかし、天功自身は、節を折ったつもりはなく、あくまでも箕子のように犬死にを避けたいにすぎないと弁明する。

それでは、天功にとって、殉難せずに忠義を尽くす道とは一体何であろうか。『鶏鳴録』の撰述目的を述べた以下の文章は、正面からこれに答えている。

彼大奸似忠、大佞似信、若結谷之徒将長秉国、成窮兇極悪、而国家亦従而淪亡矣。可不哀哉。故余作斯書、以明言其忠奸邪正之状、与其致国難之原由、奸人之釀大禍非一朝一夕之故、以明告天下後世。（〈斉昭の雪冤ひいては復権を目指す、武田耕雲斎・高橋多一郎による大奥への賄賂・嘆願工作が失敗した場合―筆者注、以下同〉彼大奸忠に似、大佞信に似、結・谷の徒が若きは将に長く国を秉り、窮兇極悪を成さんとす。而して国家亦た従ひて淪亡するなり。哀しまざるべけんや。故に余斯の書を作り、以て其の忠奸邪正の状、其の国難を致すの原由、奸人の大禍を釀すこと一朝一夕に非ざる故とを明言し、以て天下後世に明告す。『鶏鳴録』）

雪冤運動の成否に暗澹たる思いを持つ天功は、強い危機感を抱いていた。表立った運動は犬死にに繋がり、水面下の工作も奏功するとは限らない。改革派が悉く弾圧され、水戸徳川家が立ち行かなくなった場合、そうした惨状に至らしめた「真相」は湮没してしまうのではないか、と。ゆえに天功にとって、生き残るという選択は、ただ単に死を恐れているためではない。己の使命は、むしろ歴史叙述を通じて、結城をはじめとする黒幕たちの罪状を記し、「真相」を後世に託することにあったのである。

㈢「陰謀・心術」

さて、斉昭失脚の黒幕とされる人々は、それぞれいかなる「陰謀・心術」のもとで跋扈しているのか。天功はその説得的な暴露のために、有力な証拠をできる限り求めていたと考えられる。例えば結城の場合、天功はその「内応して君を陥れるの跡（内応陥君之跡）」については、「結 紙屋に与ふる書と結奴荘兵の言を以て之を證すべし（可以結与紙屋書与結奴荘兵言證之）」と断じている（『明夷録』[16]）。ここにある種の情報蒐集活動が生かされていよう。しかし、証拠

はいつも容易に入手できた訳ではなかったようである。例えば、天功の盟友にして姻戚でもある桑原信毅によれば、水戸領内の「僧徒」については、「推摩臆度」に頼って糾弾せざるを得ないという[17]。実際、このような例は、ほかにも多く見られる。

初勢相得代越相秉大柄、深忌先公之勇智、則乗時機而陥之。其意将以為奇功、使世人嘖嘖称艶、曰勢相其非常人也。前時隆盛、名震天下、若水公越相者、勢相皆知其瑕疵而擠之。使幕府之威権重於九鼎大呂者、勢相之力也。其設心既已如此。故意深不喜公之洗雪。（初めに勢相 越相に代りて大柄を秉ることを得、深く先公の勇智を忌めば、則ち時機に乗じて之を陥るるなり。其の意将に以て奇功と為し、世人をして嘖嘖称艶して、「勢相其れ非常の人なり。前時に隆盛し、名 天下に震ふこと水公越相が若き者も、勢相皆其の瑕疵を知りて之を擠す。幕府の威権をして九鼎大呂より重からしむる者、勢相の力なり」と曰はしめんとす。其の設心既已に此の如し。故に意深く公の洗雪を喜ばず。『明夷録』）

前代の老中筆頭・水野忠邦を排斥することでその地位に就いた阿部正弘は、徳川斉昭を失脚させることで、世人を驚かそうとしたに違いない。彼は斉昭の「勇智」を深く忌憚していたがために、今回の機会をうまく利用しようとしたに違いない――ここで天功はさしたる証拠を提示しない形で、阿部の「設心」を揣摩している。天功はいつも証拠を全く提示しないわけではない。しかし、「結 紙屋に与ふる書」のような具体的な資料が挙げられる場合は少なく、むしろ、疑わしい伝聞や逸事の類いに基づき、黒幕の「陰謀・心術」を「推摩臆度」する場合が多い。

且余嘗聞結与其徒語云、我欲為和漢古今未曾有之人、做和漢古今未曾有之事。雖其一時戯笑之言、可以観其心術之隠微矣。（且つ余嘗て聞くに、結 其の徒と語りて云はく、「我和漢古今未曾有の人と為り、和漢古今未曾有の事を做さんと欲す」と。其の一時戯笑の言と雖も、以て其の心術の隠微を観るべきなり。『鶏鳴録』）

岡崎采女 公の御事〔斉昭の失脚〕聞と、ひとしく喜悦のあまりにやありけむ、俄に那珂川へ舟遊に出たると云。（『顧天録』[18]）

通常では知り難いと考えられる門閥派の内輪の言動が、ありありと言及されていることは注目に値する。結城の言葉は少なくとも文面上では陰謀と結びつかないが、「心術の隠微」が見られると主張される。「余嘗聞」や「云」などのように、伝聞であることは明示されながら、これらは信憑に値する伝聞か、はたまた天功の単なる想像に過ぎないのかは知り得ない。そもそも、論証において種々の不備があっても、天功にとって、黒幕たちの陰謀は容易に観察

できるものであった。

〔結城・谷田部の党類は〕唐の仇士良が良君を愚にする手段を用ひ、　老公ニハこの儘ニて天年を終らせ給ふまで待付け、扨其節正人君士は残りなく打殺シ、彼漢の党錮明の東林の如く善類の根をたやし、小人世界と成すべきとの奸心、鏡にかけて見る如し。（『籲天録』）

このような具合で、天功は門閥派らの言動を積極的に「推摩臆度」し、種々の「陰謀・心術」を暴露しては糾弾していたのである。

二、水戸学派における豊田天功の位置
――「陰謀・心術」と政敵批判をめぐって

それでは、天功が重視する「陰謀・心術」の暴露に対し、同じく水戸学派に連なる東湖や正志斎はいかなる態度を取ったのか。本章ではこの点を通じて、天功の位置を見定めたい。まず、『明夷録』をめぐる東湖と天功の往復書簡は注目に値する[19]。他人の「奸心」がいとも簡単に読みとれるという天功の姿勢に対し、東湖は疑問を呈した。

一篇ノ大眼目ハ結カ禍ヲ搆ヘタルヲ阿カ信シ、且阿モ之ヲ以テ奇功トスルノ念アルコト、三致意候ヤウ拝見仕候ヘ共、シカ云ヨリ薄シト申ス如クニテ、アマリ甚クハ有之マシキヤ。類を充テ義ノ尽セルニ至ルトキハ、其罪免レカタク候得共、結ノ腹ハ戸藤輩ヲ擠スニアリ。然ルニ老公マテ禍ニ逢玉フハ、彼カ素願ニハアルマシク、所謂角ヲ直ストテ牛ニ及ヒタルナラン。阿モ公方ノ怒リ甚キユヘ奉行セシニテ、之ヲ以テ奇功トスルノ念アルニハ至ルマシ。イツレ二人ノ心事、僕カ眼ニテハカクマデニハ洞見シ難シ。

天功が重視しているのは、「阿部正弘が結城朝道の陰謀を信じ、かつそれを自分の功績にしたがっていること」であると東湖が鋭く捉えている。しかし彼は、結城はあくまでも改革派の筆頭である戸田忠敞と自分を排斥しようとしただけだと考え、天功の見方に疑念を呈している。また、阿部とて公方・徳川家慶の怒りを受けて職務を全うしたまでのことなので、総じて結城と阿部両人の「心事」は「洞見シカタ」いとも指摘している。これに天功は以下のように応じている。

一篇ノ大眼目、結カ禍ヲ搆ヘタルヲ阿カ信シ云々、是ハシカ云ヨリ薄シ、アマリ甚シク可有之ノ御論、愚意ニモ成程右ヤウ存不申ニモ無御座候。乍去結城ノコト春秋誅心ノ法ヲ以ハ、右ヤウ書シ候半コト的当ニコサアルヘク候。勢相トテモ甲辰乙巳ノ頃ノ口気ヲ以考候ヘハ、奇功トスル念有之コト不容疑候。追々正説ヲキヽ、只今ニテハ腹合先トハ相違仕候ニ可有御座候。是

等皆々前年ノ心事ヲ写シタル者ニ御座候。

「春秋誅心ノ法」は、『春秋』宣公二年に見える執政趙盾の故事などを意識していよう。天功はこれを楯に東湖の疑問を退け、結城への揣摩が度を過ぎていることを認めない。阿部については、「甲辰の国難」後に正論に「感化」されていると認めるものの、その「前年ノ心事」を描いているので問題は無いとして、天功はあくまでも自身の主張を貫こうとする。

以上のように、天功と異なり、東湖は門閥派における「陰謀」の存在を否定している[20]。そもそも、彼は他人の「心術」を読み取ることは容易ではないと見ていた。弘化二年の随筆おいて、東湖は北宋の名臣で知られる趙抃の故事を引用した上で、以下のように述べている。

君子小人、鈞是人也。君子既目小人以為小人、而小人亦或指君子以為小人、其心事雖甚殊、而其面目固非男女之可得而弁別、是古今人君之所病。（君子小人、鈞しく是れ人なり。君子既に小人を目して以て小人と為し、而して小人も亦た或は君子を指して以て小人と為す。其の心事甚だ殊なりと雖も、其の面目固より男女の得て弁別すべきに非ず。是れ古今人君の病む所なり。[21]）

趙抃は、「小人は小さな誤りを犯しただけで退くべきであるのに対し、君子は多少誤りを犯しても庇うべきである」と主張し、君子と小人の峻別を主張していた。東湖が考えるに、趙の出発点は良いが、実際人君の立場に立った場合、そもそも君子と小人の区別はつきにくい。天功において、ある人間が「君子／小人」または「正／邪」のいずれに属するのかは、自明のように捉えられる傾向がある。これに対し、「甲辰の国難」後の東湖は、それを「心術」の詮索によって判断するのは難しいと考える。

他方、水戸学派におけるもう一人の重鎮・正志斎は、「陰謀・心術」の暴露にいかなる態度を取ったのか。管見の限り、天功の姿勢に対するその直接な論評は見られない。ただし、正志斎は「他人の心術を暴露し、毀誉褒貶を加える」ことに批判的であったことが分かる。

後世莫不以誠為言。然逆億之風更甚。蓋誤会春秋褒貶之義、好臧否人物、為誅意之説、以文致之。徼以為知、訐以為直。而忠厚之風蕩尽、非聖人待人之意也。（後世誠を以て言と為さざるは莫し。然れども逆億の風更に甚し。蓋し春秋褒貶の義を誤会す。好みて人物を臧否し、意を誅するの説を為し、文を以て之を致す。徼を以て知と為し、訐を以て直と為す。而して忠厚の風蕩尽す。聖人 人に待つの意に非ざるなり。[22]）

正志斎は、「春秋褒貶の義」の誤用による人物批評を批判し、他者の心術の詮索に関心を示していない。これは、

「春秋誅心ノ法」に倣おうとする天功と鮮明な対比をなしている。正志斎のこうした態度は、その師である藤田幽谷（一七七四～一八二六、以下「幽谷」）から影響を受けていると考えられる。『及門遺範』によれば、幽谷は人物の「臧否」を喜ばず、『資治通鑑』を教えることがあっても、朱熹の『通鑑綱目』に及んだことはなかった。その理由は、後者に付載されている劉友益の「書法」と尹起莘の「発明」は古人を厳しく「譏議」しており、人の度胸を狭めかねないという。[23]

すなわち、少なくとも言説上において、幽谷と正志斎は他人への峻烈な批判を忌避していた。先行研究が解明した影響関係を踏まえれば、彼らのこうした態度は、伊藤仁斎や荻生徂徠による宋学批判の流れを受け継いだものと考えられる。[24] さきほど検討した東湖も併せて比較した場合、天功は「陰謀・心術」に強烈な関心を示す点、そして政敵への峻烈な批判を正当化している点で、水戸学派において特殊な位置を占めていたと言える。

三、吉田松陰における楊継盛受容[25]
――「殉難」の先鋭化

水戸学派における天功の位置を確認したところで、本章では、彼の手を離れた『楊椒山全集』はいかに受容されたのか、という問題に戻りたい。その際、もっとも注目に値するのは、松陰である。

天功や多くの志士たちと同じく、松陰も当初「除奸」に強い関心を持っていた。ハリスの登城によって急転直下した安政五年の政局を受け、松陰は八月上旬の「囚室臆度」において、「関東の二奸は、曰く閣老堀田備中守〔堀田正睦〕、曰く紀伊の附家老水野土佐守なり」と断定する。[26] 九月九日の松浦松洞宛書簡では、後者である水野忠央の刺殺を唆している。[27] 十月下旬、尾張・水戸・越前・薩摩が連合して大老井伊直弼を誅殺する風聞に接すると、松陰はさらに当時老中であった間部詮勝の要撃策を計画するにいたる。

しかし、松陰がただ単に己の「除奸」を鼓舞するために、楊継盛を受容したとは限らない。時期で説明すると、松陰が楊継盛の文章にはじめて接したのは、勤王僧・月性が安政四年十二月二十四日からその同五年五月の死去までに贈与した、『楊椒山全集』四巻によると考えられる。[28] 一方、楊に対するそのはじめての言及は、彼が野山獄に再度投じられた後の安政六年の正月にくだる。すなわち、梅田雲浜の救出や間部詮勝の要撃策などの計略が次々と失敗し、己や同志の殉難そのことでしか局面は打開できないと松陰が考え始めた時点で、楊継盛がようやく彼の脳裏に浮上したようである。

明楊椒山集一帙、吾方外亡友清狂師所贈。清狂奇節、高於一時、顧推重余曰、子能為椒山者、故吾以此集為贈也。今清狂病亡一年、余進不能擊奸権於当路、退不能伏斧鑕従吾師於九原、猶尚靦顔視息偸生於岸獄。其負吾師見推之意多矣。何況対楊先生其人於黄巻中乎。（明『楊椒山集』一帙、吾方外の亡友 清狂師の贈る所なり。清狂が奇節、一時に高し。顧みて余を推重して曰く、「子能く椒山為らんとする者なり。故に吾此の集を以て贈と為すなり」と。今清狂病亡して一年、余進みて奸権を当路に撃つこと能はず、退きて斧鑕に伏して九原に於いて吾が師に従ふこと能はずして、猶ほ尚ほ靦顔視息して岸獄に生を偸む。其の吾が師に推さるるの意に負くこと多し。何ぞ況や楊先生其の人に黄巻の中に対するをや。）[29]

月性は楊継盛を手本にと、『楊椒山集』を自分に贈与してくれたと松陰は認識している。「奸権」を撃つことができず、いたずらに延命している自己を深く恥じた松陰は、「殉難の手本」としての楊継盛像に並々ならぬ関心を寄せた。以下の書簡は、これをよく表している。

此上は是非杉蔵に一命を棄てさせたし。杉蔵死して呉さへすれは吾輩生残りても必一事はなすなり。中々九原の下にて杉蔵に面目なきことは不仕候。楊椒山集送り候に付、塾中にて岡部・作間其外と御会読奉願候。小弟所見間違に候はゝ、椒山非忠臣に付、楊継盛非忠臣論一篇奉頼候。……楊椒山か狗死てなき訳、行状碑銘等に相見え候。椒山か狗死てなきこと分り候へは、同志の人なり。……楊椒山杉蔵にも御見せ奉頼候。[30]

「行状碑銘」は『楊椒山全集』巻四に収録されたものを指すのであろう。松陰は、楊継盛は決して犬死にではないと力説している。楊継盛は犬死にかという問題は明清以来議論があり、天功と東湖も『楊椒山全集』の序文においてそれぞれ触れていた。尊攘志士の間においても、上書という楊の選択はむしろ犬死にだとして評価しない声が存在していた。[31] 松陰はこうした声を意識していたのであろう。

犬死にという評価の否定に基づいて、松陰は松下村塾で岡部富次郎・作間忠三郎らと「楊椒山集」を会読するよう、兄の杉梅太郎に頼んでいる。また、入江杉蔵にも文集を見せるよう求めている。ここに、入江の殉難の決意を促すという意図は明瞭である。楊継盛の事跡に対して、天功や東湖のように序文で論評する、あるいはほかの尊攘志士のように漢詩に読み込むのと異なり、松陰は自己の鼓舞にとどまらず、他人の殉難を露骨に促す役割まで見出している。『楊椒山全集』は、殉難を促す恰好の道具として機能したのである。恐らく当初天功が想像できなかった使い方ではあるが、楊の殉難を肯定している以上、このような使い方

の論理的な可能性は、天功の出版の時点ですでに含まれていよう。松陰はこの可能性を先鋭化させた点において、江戸末期における楊継盛受容の極北を示している。

しかし、松陰のこうした殉難への執着に、やがて転機が訪れる。安政六年四月上旬、明・李卓吾の『続蔵書』を閲読した後である。徐階は厳嵩におもねって楊継盛を見殺しにしたが、後年に厳嵩の排除に成功する。こうした事実から、時勢をはかって「功業」を成す選択肢は否定できないと松陰は想到し、殉難に対する緊迫感が後退する。いわゆる「自然説」への転換である。[32] これにより、楊継盛の事跡をもって同志の死を促すことはなくなるが、松陰はその後も「殉難」に関する文脈で楊継盛に言及していく。[33]

以上をまとめれば、楊継盛は松陰の「晩年」である安政六年の正月に遅れて浮上し、その最期まで思念されつづけた。この事実を考慮した場合、『留魂録』の冒頭に置かれたかの有名な歌――「身はたとひ武蔵の野辺に朽むとも留置まし大和魂」――への理解として、本稿の「はじめに」で触れた柿村重松による指摘が有力となってくる。青山英正は、松陰の歌にみえる「やまとだましひ」は、『源氏物語』夕霧巻や中世の物語「浅茅が露」などにみえる「たましひ」のあり方を受け継ぎつつ、「特定の近親者に対する深い親愛の情」を「私欲なき愛国心」へと転化させていると指摘する。[34] 読書または伝聞を通じて、この和文脈に松陰が触れている可能性は確かに排除できない。しかし、「留置」という動詞に注目すれば、柿村が指摘するように、松陰が確実に知っている楊継盛の辞世詩に見える「平生未だ報せざる恩、留めて忠魂の補と作す（平生未報恩、留作忠魂補）」の一句が直接踏まえられていると見たほうが、影響論として有力であろう。

また、『留魂録』の歴史叙述としてのあり方も、楊が獄中で受けた酷刑やそれに臨む超然とした態度を記録した「自著年譜」の影響を受けていると考えられる。松陰は下田踏海後の安政はじめに記した『幽囚録』や『回顧録』において、早くも己の名を後世に残そうとする「自己の作品化」を図っていたとされる。[35] この点を考えれば、自著年譜が体現する「自己の作品化」という性質こそ、松陰をして、「中々一通りの男ではない」[36] と楊継盛を高く評価せしめたのではないだろうか。この点において、松陰は楊継盛や『回天詩史』を記した東湖と同じく、自伝的な著述を通じて、苦難を生きる自己の心境を表現することに力点を置いている。これは黒幕の邪悪さを遺憾なく記しおき、来たるべき審判に備えようとする天功のベクトルとは対照的だと言えよう。

おわりに

以上、本稿は豊田天功や吉田松陰を軸に、江戸末期における楊継盛受容の水脈を辿ってきた。『楊椒山全集』の出版をもたらした天功の受容の仕方は、必ずしも松陰をはじめとする尊攘志士におけるそれとは一致していなかった。

天功は幼少期から楊継盛の文集を耽読していた。そして弘化二年（一八四五）、熾烈な政争を生きる彼は楊と同じく、「奸臣」を弾劾することによって死生の決断を迫られていた。しかしその際、天功はあえて楊のような殉難には進まなかった。「徹底的な除奸によって殉難する」という楊の選択を熟知していながら、天功は、「除奸すれども殉難せず」という緊張感を孕む独自の選択をしたのである。それは「甲辰の国難」を引き起こした黒幕の邪悪さを、後世に伝えたいという強い願望に由来している。「陰謀・心術」に対する彼の暴露は、この願望の象徴的な現れである。[37]

一方、保身という前提のもとで「奸臣」の罪状を後世に残そうとする天功と異なり、志士たちは、過激な政治活動によって「殉難」することへと積極的に邁進した。そこでは天功のような葛藤は概して見られず、楊継盛は「殉難の手本」として、志士たちにストレートに思念されていた。[38]

安政六年初頭の松陰は、こうした受容の極北であった。彼は楊の文集を、門人の殉難を促すことに積極的に活用した。また、『留魂録』の叙述の仕方や、その冒頭に置かれた歌にとって、楊の自著年譜や辞世詩に対する松陰の共鳴は無視できないと考えられる。総じて、尊攘志士の過激な政治活動や殉難の誘導という形で、天功が当初意図しなかったと思われる受容の結果が、現出したと言える。

詳細は別稿に譲るが、本稿は水戸学派内部に見られる人間観・政争観の多様性についても触れた。東湖や正志斎に比べ、「陰謀・心術」に対する天功の関心は独特であり、かつそれが『明夷録』『鶏鳴録』を撰述するための情報収集を支えていたと考えられる。奈良勝司は、天功は安政期以降に高度な情報収集や廻覧活動を展開したと指摘しているが、[39]本稿が解明した天功の関心がそこに継承されている蓋然性は高いであろう。とすれば、天功において、情報収集は「精緻な観察にもとづき既存の常識を絶えず刷新していく」[40]ことを必ずしも意味しない。それはむしろ、黒幕たちの「陰謀・心術」のような予め決めた結論を証明したいという、すぐれて主観的な認識に基づく場合もあったのではないだろうか。[41]従来、江戸末期における情報――とりわけ海外情報――の収集と運用は、日本全国における「公議輿論」の成熟度、またはある思想家が「開明的」か「狭隘

的」かを測る指標としてしばしば用いられた。[42] 本稿は動機に注意を促す点において、江戸末期の情報収集や運用に対する異なる捉え方を模索した試みとしても、位置づけられよう。

注

(1) 近年の研究として、佐藤温「幕末の志士における「正気歌」の受容」(『江戸の学問と文藝世界』森話社、二〇一八年)、松浦智子「日本における岳飛〝文芸〟の展開」(『人文研究』二〇三号、二〇二一年)が挙げられる。

(2) 楊継盛の文集自体は遅くとも元禄元年までに日本に伝来している。大庭脩「元禄元年の唐本目録」(『史泉』三五・三六合併号、一九六七年、一六一頁)を参照。なお、楊の生涯をめぐる歴史的背景については、城地孝「明嘉靖馬市考」(『史学雑誌』一二〇編三号、二〇一一年)を参照。

(3) 名は亮、字は天功、号は松岡・晩翠。その伝記的事項については、青山延光「豊田天功墓銘」(『松岡先生文集乾/坤』、里美を知る会、二〇〇四年)、豊田靖『松岡先生年譜』(一八九三年)、小松徳年『東京都多摩市高橋清賀子家文書目録:豊田天功・小太郎関係文書』解題(茨城県立歴史館、一九九五年)を参照。なお、本稿の請求記号はとくに注記がないかぎり、すべてこの目録による。

(4) 壬子(嘉永五年・一八五二)閏二月四日、桜真金差出豊田天功宛、『桜真金書簡集』(請求記号:八八)。年不明季春旬前三日、広沢富次郎差出豊田小太郎宛、『諸藩士書簡集二』(請求記号:八九—二)。年不明四月七日、日下部伊三治差出豊田天功宛、『日下部翼書簡集一』(請求記号:九二—一)。

(5) 吉田公平「鈴木無隠遺文」(『アジア文化研究所研究年報』四〇巻、二〇〇五年)。

(6) 『松南雑草』大正四年(一九一五年)(町泉寿郎解題『近代日本漢学資料叢書二』研文出版、二〇一七年)一八〜二六頁。

(7) 『近世常陸の出版』(『日本書誌学大系』八三、青裳堂書店、一九九九年)八〇〜九八頁。

(8) 本稿では、弘道館・彰考館の運営に携わった、寛政期以降の水戸徳川家における知識人を水戸学派と総称する。いわゆる「水戸学者」には様々な見解の相違があることを、強調するためである。

(9) 「楊椒山全集序」(『楊椒山全集』、請求記号:二〇—一〜五)。

(10) 「始め余年十六七なり。豊君余に長ずること一歳、嘗て二三の同志と斯の集を読み、君悲憤痛恨し、且つ泣き且つ誦し、一座悚然として感動す(始余年十六七。豊君長余一歳、嘗与二三同志読斯集、君悲憤痛恨、且泣且誦、一

座悚然感動)」。この序文は菊池謙二郎編『新定東湖全集』(博文館、一九四〇年、二五一頁)にも確認できる。

(11) 「与結城朝道書」(『松岡先生文集』、長久保猷編『長久保叢書』東京大学史料編纂所蔵)。

(12) ともに『松岡先生建議案』(請求記号:六一)に見える。

(13) 以下、『明夷録』と『鶏鳴録』の引用は、それぞれ、天功自筆稿本とされる石川武美記念図書館成簣堂文庫蔵『明夷録』(川瀬一馬編著『お茶の水図書館蔵新修成簣堂文庫善本書目』一九九二年、八九二頁)と、同じく天功自筆稿本と思われる茨城県立歴史館蔵『鶏鳴録』による(請求記号:一二五)。

(14) これによって、改革派の盟友たちからは変節と疑う声が天功に届いたようである。正志斎や東湖と同様、天功もまた事の成否を度外視して、激烈な言行によって人々の「気」を奮い立たせることをしばしば説いていたからであろう。この種の言説を、先行研究は「振気論」と呼称している(高山大毅「振気論へ――水戸学派と古賀侗庵を手がかりに」、『政治思想研究』一九号、二〇一九年)。その天功における現れは、以下を参照。「太田学館記」天保八年季秋朔日(前掲『松岡先生文集 乾/坤』)。「宗忠簡公集序」天保乙未(天保六年・一八三五)春三月二十二日(前掲『松岡先生文集』)。「答小松崎恭書」年不明十一月廿一(前掲『松岡先生文集』)。

(15) 天保期における天功の易占実践については、綱川歩美「水戸学者・豊田天功の易占――近世易占書の批判的実践とその世界観をめぐって」(『書物出版と社会変容』八号、二〇一〇年)を参照。

(16) 先行研究によれば、斉昭は商人「紙屋」(紙屋長兵衛)になりすまし、結城の家来である庄兵衛を寝返らせることで、結城の「反逆の証拠」を入手した(仙波ひとみ「水戸徳川家と宇和島伊達家」、『茨城県史研究』九九号、二〇一五年)。天功は、「紙屋」の正体を見破れていないようである。

(17) 「羽倉」(羽倉簡堂か)を経由して水野忠邦へ上呈することを想定している甲辰十月廿四日封事(前掲『松岡先生建議案』所収)にある付箋に見られる。天功は、「僧徒ノ罪、向山常福寺ハタシカ讒訴ノ様推察、外ニモ上野維摩院ノ事認可申歟。名ヲ出シ候方着実ニ可有之歟。外ニ御心附ノ奸僧共御座候ハバ被仰越度奉存候」と問うのに対し、桑原は、「僧徒讒訴ノ事万々無相違事ニ候へ共、是ト申候証跡ハ顕ハレ不申、皆々推摩臆度ノ形ニ候間」などと告げている。

(18) 請求記号:一一八。

(19) 前掲成簣堂文庫本『明夷録』に付載されている。書簡に署名や日付はないが、以下の理由で、差出人は東湖であ

ると判断した。①来簡が示す門閥派への態度は、東湖による諸文献のそれと共通している。②「一　東湖先生手簡及意見／一　天功先生ノ答書扣／原田明善旧蔵」（／は改行）という朱書が見え、前掲『お茶の水図書館蔵新修成簀堂文庫善本書目』もこれに基づいてか、東湖と天功の往復書簡であると著録している。

(20)　これに関連して、東湖は結城らの門閥派に宥和的な態度を示している。『許々路之阿登』（前掲『新定東湖全集』一一〇〇頁）、「藤田東湖書簡「戸田忠太夫返書添付」」（嘉永二年三月七日、『水戸藤田家旧蔵書類　三』日本史籍協会、一九三〇～三四年、三六二頁）、「癸丑結城処刑之儀」（前掲『新定東湖全集』一〇三四頁）などを参照。なお、東湖は「かくし名」や斉昭が考案したとされる「神発文字」が頻繁に使用されていることを指摘し、改革派の行動が「陰謀」めいてしまうことを憂慮している（『許々路之阿登』、前掲『新定東湖全集』一〇九五頁）。

(21)　『東湖随筆』乙巳〔弘化二年、一八四五〕三月念三録（前掲『新定東湖全集』五二五頁）。

(22)　「不逆詐」章（『読論日札　坤』無窮会図書館神習文庫蔵写本）。ほかに同書「好勇疾貧乱也」章、「君子亦有悪乎」章、安政三年十月十三日寺門政次郎宛書簡（大阪大学会沢正志斎書簡研究会編『会沢正志斎書簡集』思文閣出版、二〇一六年、四九頁）や『下学邇言』（明治二十五年会沢善発行本）十九丁裏なども参照。

(23)　『及門遺範』（菊池謙二郎編『幽谷全集』吉田弥平、一九三五年、七八三頁）。ほかに同書の七八二頁や七八七頁も参照。

(24)　清水茂校注『童子問』（『近世思想家文集』日本古典文学大系、岩波書店、一九六六年）巻中の六十五章や巻下の三十七章を参照。徂徠に関しては、『徂徠先生答問書』や『経子史要覧』（『荻生徂徠全集』第一巻、みすず書房、一九九四年、四三二頁、五二七頁）を参照。水戸学派における仁斎学受容については吉田俊純「水戸学と伊藤仁斎」（『寛政期水戸学の研究』吉川弘文館、二〇一〇年）、正志斎の仁斎学・徂徠学受容については高山大毅「遅れてきた「古学者」――会沢正志斎の国制論」（『近世日本の「礼楽」と「修辞」』東京大学出版会、二〇一六年）を参照。

(25)　松陰における楊継盛尊崇について、島田英明『歴史と永遠――江戸後期の思想水脈』（岩波書店、二〇一八年）がすでに触れている（一六七頁、一九八頁）。島田はこれを「永遠性獲得願望」という独自の枠組みで扱うのに対し、本稿では影響史的な視点から論じる。

(26)　『戊午幽室文稿』（『吉田松陰全集』第四巻、一二〇頁）。以下『吉田松陰全集』の引用は全十巻の「定本版」（岩波書店、一九三四～三六年）に基づき、巻数を省略する。『己未文稿』『照顔録』『留魂録』は第四巻、安政四年の書

簡は第五巻、安政五・六年の書簡は第六巻、『東行前日記』は第七巻所収。

(27) 八九頁。

(28) 「楊椒山集遣上度候へとも後便を相待候」(安政四年十二月二十四日、月性差出松陰宛、四八八頁)。

(29) 「題楊椒山集」(安政六年正月十二日、『己未文稿』二七一頁)。松陰の理解した月性の意図は、「祭亡友方外清狂師文」(安政六年三月十四日、『己未文稿』三三五頁)や「書楊椒山全集後」(一坂太郎編・田村哲夫校訂『高杉晋作史料』第二巻、マツノ書店、二〇〇二年、三五五頁)からも確認できる。

(30) 安政六年正月十三日、兄杉梅太郎宛、一八七頁。ほかに「復士毅」(正月十二日、『己未文稿』二七〇～七一頁)を参照。

(31) 例えば、老中である安藤信正の刺殺を志す児島強介(一八三七～六二)は、「上は聖主を安じて下は民を安ず、誓ふ　奸臣と天を戴かざるを。椒山・胡銓の輩を一笑し、空しく疏奏を将て豪権に逆ふことを(上安聖主下安民、誓与奸臣不戴天。一笑椒山胡銓輩、空将疏奏逆豪権)」と詠んでいる(獄中作、帝尨山人編・春荘冗史補『振気篇　詩文』一八六九年)。児島は、上書によって政局を変える道をもはや見限っており、それに頼った楊継盛や南宋の胡銓は全く犬死にであったと一蹴している。胡銓は、金との和議の拒絶や権臣・秦檜らの処刑を建言したことで知られている。

(32) 「読続蔵書遜国名臣」(安政六年四月二日、『己未文稿』三四〇頁)。「読続蔵書靖難内閣」(同四月五日、『己未文稿』三四一頁)。入江杉蔵宛、安政六年四月廿二日頃、三一〇頁。松陰の死生観の変化について、桐原健真「死而不朽――吉田松陰における死と生」(『季刊日本思想史』七三号、二〇〇八年)や前掲島田著書に詳しい。

(33) 『照顔録』(安政六年五月念二日、四六六頁)。『東行前日記』五一八頁。高杉晋作宛、安政六年七月中旬、三六〇頁。

(34) 「志士の歌を読む」(『幕末明治の社会変容と詩歌』勉誠出版、二〇二〇年、二四一～四五頁)。

(35) 前掲島田著書、二〇八頁。ほかに谷川恵一「歴史の彼方」(『歴史の文体　小説のすがた――明治期における言説の再編成』平凡社、二〇〇八年)も参照。

(36) 岡部富太郎宛、安政六年二月某日、二三八頁。

(37) 天功と比較して興味深い人物に、前掲島田著書の第六章が扱う森田節斎や、三ツ松誠「「公論正義」の敵」(塩出浩之編『公論と交際の東アジア近代』東京大学出版会、二〇一六年)が扱う井伊直弼の心腹・長野義言がある。次々と殉難へと向かう志士たちを傍目に、節斎はあくまでも文士として、彼らの「史伝」の作成や奸賊への筆誅を自分の

領分としたという。殉難しない理由を歴史叙述の完遂に見出す点は天功と共通するが、敵の「陰謀・心術」の暴露に関心が集中していない点は異なる。一方、義言は徳川斉昭らが「陰謀」を企んでいると積極的に疑い、その徹底的な弾圧を唱えるが、この姿勢は彼が持つ壮大な国学的世界観に由来していると説明される。翻って、天功が「陰謀・心術」に強烈な関心を寄せた理由について、明快な答えは提示しにくい。さしあたり、彼が暴露する対象は門閥派に限定されていないことを附言したい。嘉永元年に編集した岳飛事蹟集では宋の高宗（拙稿「豊田天功『精忠新録』の編集過程――水戸学派の「振気」戦略をめぐって」、『日本中国学会報』七三集、二〇二一年）、嘉永二年の上書では改革派同士の高橋多一郎（「嘉永元年戊申 七月呈稿 附加治吉次郎来訪梵網経一儀之筆記」、『松岡先生建議案 二』、請求記号：六二―二）、嘉永六年の『裂眥録』（請求記号：三〇八―一）では佐藤一斎がそれぞれ対象となっている。

(38) 前掲柿村論文に引用される詩文を参照。

(39) 奈良勝司「幕末情報の編集と廻覧――豊田天功編『国事記』『新聞』を素材に」（『明治維新と史料学』吉川弘文館、二〇一〇年）。

(40) 奈良勝司「後期水戸学と国際秩序――文久元年の「新聞」からみる」（『立命館言語文化研究』二三巻三号、二〇一二年、九八頁）。

(41) 情報の博捜は必ずしも視野の広さや「批判精神」に結びつかない点について、高山大毅が指摘している（「『良将達徳鈔』をめぐって――尚武の思想家としての古賀侗庵」、『駒澤国文』三三号、二〇一七年、三三頁）。なお、この点につき、近年台頭している種々の「陰謀論」も示唆に富む（『現代思想』二〇二一年五月号、特集＝「陰謀論」の時代」、青土社）。

(42) 宮地正人「風説留から見た幕末社会の特質」（『幕末維新期の社会的政治史研究』岩波書店、一九九九年）。前田勉「古賀侗庵の海防論――朱子学が担う開明性」（『兵学と朱子学・蘭学・国学――近世日本思想史の構図』平凡社、二〇〇六年）。眞壁仁『徳川後期の学問と政治――昌平坂学問所儒者と幕末外交変容』（名古屋大学出版会、二〇〇七年）。

附記　本稿は二〇二一年度日本思想史学会大会における口頭発表を元に改稿したものである。茨城県立歴史館、石川武美記念図書館には資料調査の便宜をはかって頂いた。執筆に際してご教示頂いた方々と併せて御礼申し上げる。
本稿はJSPS科研費 20J21298 の助成を受けたものである。

（東京大学大学院）